

張籍詩詠注(7)

——「猛虎行」「別離曲」——

畑村 学  
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (7)

Manabu HATAMURA  
Hidenori TACHIBANA

訳注

本篇には、13「猛虎行」・14「別離曲」(ともに中華書局『張籍詩集』卷一)の訳注を掲載する。

13 別離曲

【題解】

「猛虎行」は樂府題。郭茂倩『樂府詩集』卷三二では、相和歌辭・平調曲に属する。「平調曲」の解題に次のように言う。

『古今樂録』曰、「王僧虔『大明三年宴樂技録』、平調有七曲、一曰『長歌行』、二曰『短歌行』、三曰『猛虎行』、四曰『君子行』、五曰『燕歌行』、六曰『從軍行』、七曰『鞠歌行』。荀氏録所載十二曲、伝者五曲。武帝「周西」、「対酒」、文帝「仰瞻」、並『短歌行』。文帝「秋風」、「別日」、並『燕歌行』是也。其七曲今不伝。文帝「功名」、明帝「青青」、並『長歌行』、武帝「吾

年」、明帝「双桐」、並『猛虎行』。「燕趙」、「君子行」。左延年「苦哉」、「從軍行」、「雉朝飛」、「短歌行」是也。

『古今樂録』(陳・釈智匠)に曰く、「王僧虔(劉宋)『大明三年宴樂技録』に、平調に七曲有り、一に『長歌行』と曰い、二に『短歌行』と曰い、三に『猛虎行』と曰い、四に『君子行』と曰い、五に『燕歌行』と曰い、六に『從軍行』と曰い、七に『鞠歌行』と曰う。荀氏録(晋・荀勗)の載する所の十二曲、伝わる者は五曲。武帝「周西」「対酒」、文帝「仰瞻」は、並びに『短歌行』。文帝「秋風」「別日」は、並びに『燕歌行』是れなり。其の七曲は今伝わらず。文帝「功名」、明帝「青青」は、並びに『長歌行』、武帝「吾年」、明帝「双桐」は、並びに『猛虎行』。「燕趙」は、「君子行」。左延年の「苦哉」は、『從軍行』、「雉朝飛」は、『短歌行』是なり」と。

二〇〇一年十二月十九日受理

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科講師  
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教

「猛虎行」は七つある平調曲のひとつであり、魏の武帝と明帝の「猛虎行」は、晋の荀勗の頃にはあったが、劉宋の大明三年（四五九）にはすでに伝わっていない。魏明帝の作は、後に述べるように『藝文類聚』や『初学記』に採録されているが、武帝の「吾年」で始まるとされる「猛虎行」は、現在伝わっていない。

また、「猛虎行」の解題には次のように言う。

古辞曰、「飢不従猛虎食、暮不従野雀棲。野雀安無巢、遊子為誰驕」。魏明帝辞曰、「双桐生空枝、枝葉自相加。通泉溉其根、玄雨潤其柯」。『古今樂録』曰、「猛虎行」、王僧虔『技録』曰、「荀録所載、明帝『双桐』一篇、今不伝」。『樂府解題』曰、「晋陸機云、『渴不飲盜泉水』、言従遠役、猶耿介、不以艱劍改節也。又有『双桐生空井』、亦出於此」。

古辞に曰く、「飢うるも猛虎に従いて食らわず、暮るるも野雀従いて棲まらず。野雀 安んぞ巢無からんや、遊子 誰が為にか驕れる」と。魏の明帝の辞に曰く、「双桐 空枝を生じ、枝葉 自ら相加う。通泉 其の根に溉ぎ、玄雨 其の柯を潤す」と。『古今樂録』に曰く、「猛虎行」、王僧虔『技録』に曰く、『荀録の載する所、明帝の『双桐』の一篇は、今 伝わらず』と。『樂府解題』（唐・吳兢作）に曰く、「晋の陸機云う『渴するも盗泉の水を飲まず』とは、遠役に従うも、猶お耿介として、艱険を以て節を改めざるを言うなり。又『双桐生空井』（魏明帝）有るも、亦た此に出づ」と。

『樂府詩集』には、唐以前では魏文帝、陸機、謝惠連（二首）の作、唐代に入り儲光羲、李白、張籍と同時代の韓愈、李賀、後では唐末五代の齊己の詩が収録されている。また、齊己の後に載せられる梁簡文帝の作は、詩題が「双桐生空井」となっており「猛虎行」ではない。これは、魏明帝「猛虎行」の一句をそのまま詩題にしたものであり、『樂府詩集』が簡文帝のこの詩を歴代「猛虎行」の末に付しているのも、そうした理由によるものと思われる（内容的にも類似）。

なお、『樂府詩集』に採録されていないものに、「古猛虎行」（古辞。不完篇で、郭茂倩解題に引かれる四句以外に四句が存する）、魏明帝（『藝文類聚』卷二八・『初学記』卷七ほか）、劉宋の孔欣（『文選』卷四六任昉「王文憲集序」の李善注に四句が引かれる）、同じく劉宋の荀雍（『太平御覽』卷三五一に二句が引かれる）、唐末の李咸用（『全唐詩』卷六四四）のものがある。また、先の樂府解題より、魏武帝にも同題の樂府があったことがわかるが、今は伝わっていない。

歴代「猛虎行」における張籍の詩の特徴については、【補】で詳しく述べ

ることにする。

【本文・書き下し文】

- |            |  |
|------------|--|
| 1 南山北山樹冥冥  | 南山 北山 樹冥冥たり                              |
| 2 猛虎白日繞林行  | 猛虎 白日 林を繞りて行く                            |
| 3 向晚一身當道食  | 晩に 向 <small>なん</small> として 一身 道に当たりて食らえば |
| 4 山中麋鹿尽無聲  | 山中の麋鹿 尽 <small>ことごと</small> く声無し         |
| 5 年年養子在空谷  | 年年 子を養いて 空谷に在り                           |
| 6 雌雄上山不相逐  | 雌雄 山に上りて 相逐わず                            |
| 7 谷中近窟有山村  | 谷中 窟に近づきて山村有り                            |
| 8 長向村家取黃犢  | 長に村家に向かいて 黃犢を取る                          |
| 9 五陵年少不敢射  | 五陵の年少 敢えて射せず                             |
| 10 空來林下看行迹 | 空しく林下に來りて 行迹を看るのみ                        |

【口語訳】

- 1 南の山にも 北の山にも 樹木がうっそうと茂り
- 2 猛虎は 日中 その林のなかをめぐり歩く
- 3 夜になろうとする頃 ひとり道で獲物を食らえば
- 4 山中の麋鹿たちは みな音も立てないでいる
- 5 毎年 子を深い谷で育て
- 6 そのため雌と雄は 山に上る時 一緒に行動しない
- 7 谷の中 洞窟の近くに山村があり
- 8 虎はいつも村の民家に行つて 子牛をつかまえてくる
- 9 五陵の若者たちは 自分から進んで弓で射ろうとはせずに
- 10 ただ林下にやつてきて その足跡を見守るばかり

【押韻】

冥―下平一五青、行―下平一二庚、声―下平一四清（古詩通押）  
 谷・逐・犢―入声一屋  
 射・迹―入声二二昔

【語釈】

1・2 南南北山樹冥冥、猛虎白日繞林行

〔南山北山〕南の山にも北の山にも。具体的に指す山があるわけではない。後に「五陵」(前漢の皇帝の陵墓で長安の東南郊外にある)と地名が出てくるが、これは「年少」(若者)を修飾語して一般名詞化されており、「南山北山」も、特に五陵付近の山を想定する必要はない。

〔南山〕「北山」とともに『毛詩』に見える古い言葉であり、「小雅・南山有臺」に、「南山有臺、北山有萊」(南山に臺有り、北山に萊有り)と、二つの山が併称され、しかも張籍と同じく山に草木が茂る様子が詠われている。

唐詩で「南山」と「北山」が併称される例は、例えば儲光羲「同王十三維偶然作十首」其二(『全唐詩』卷一三七)に、「北山種松柏、南山種蒺藜」(北山に松柏を種え、南山に蒺藜を種う)と見える。

なお、「南山」と虎との関係は、李白「白馬篇」(王琦注本卷五)に、「弓摧南山虎、手接太行孫」(弓は南山の虎を摧き、手は太行の孫に接す)と見える。李白の詩は、後の「五陵年少」の【語釈】でも触れる。

〔冥冥〕樹木が鬱蒼と茂るさま。古く『毛詩』小雅「無將大車」に、「無將大車、維塵冥冥」(大車を將むる無かれ、維れ塵冥冥たり)とある。これは塵が立ちこめて暗い様子を言う。『楚辭』九章「涉江」に、「深林杳以冥冥兮、猿狖之所居」(深林 杳として以て冥冥たり、猿狖の居る所なり)とあるのは、張籍と同じく樹に覆われた深い林の様子を言う。王逸注に「山林草木茂貌」(山林の草木の茂る貌)と言う。

唐詩にも用例が多く見られるが、樹木が茂っているという意味では、蔡希寂「贈張敬微」(『全唐詩』卷一四)に、「大河東北望桃林、雜樹冥冥結翠陰」(大河の東北 桃林を望み、雜樹冥冥として翠陰を結ぶ)とあり、張籍と同じく「樹」と一緒に用いられている。

張籍にはこの一例のみ。

〔猛虎〕猛々しい虎。「猛虎」のことば自体は、古く『礼記』檀弓下に「苛政猛於虎也」(苛政は虎よりも猛し)とある。「猛虎」を熟語で用いたものに、『漢書』司馬遷伝所引「報任少卿書」に、「猛虎処深山、百獸震恐」(猛虎深山に処り、百獸震恐す)とあり、また、詩の用例では、李陵の詩(『文選』卷四三孫楚「為石仲容与孫皓書」李善注所引)に、「幸託不肖軀、且当猛虎歩」(幸わくは不肖の軀に託し、且く猛虎の歩みに当たらんことを)とある。

「虎歩」は拳動の威武あるを言う。唐詩にも用例が多く、杜甫もたくさん使っている。

〔繞林行〕林の中をめぐり歩く。昼間の虎の行動を言う。

ある場所を繞(邊)るとするのは古くからある表現。「繞林」(邊林)は唐詩にいくつか用例が見えるが、動物を主語とした例は、張説「奉和聖製過寧王宅応制」(『全唐詩』卷八七)に、「竹院龍鳴笛、梧宮鳳遶林」(竹院に龍は笛を鳴らし、梧宮に 鳳は林を遶る)、李白「蜀道難」(王琦注本卷三)、「但見悲鳥号古木、雄飛雌從繞林間」(但だ見る 悲鳥 古木に号び、雌は飛び雌は從いて林間を繞るを)とあるのは、鳥の動作を言う。また、同時代の元稹「和李校書新題樂府十二首・五弦彈」(『元稹集』卷二四)には、「辭雄皓鶴警露啼、失子哀猿繞林嘯」(雄に辭せし皓鶴は 露に警えて啼き、子を失いし哀猿は 林を繞りて嘯く)と、猿の行動として見える。

なお、虎が深い山のなかにいることは、先の司馬遷「報任少卿書」に、「猛虎 深山に処る」と見えた。

〔白日〕太陽の出ている時間。日中。3句の「晚」に対応している。虎の習性として、昼間は日の当たらない林の中で過(こ)し、夜になって行動する。韓愈「猛虎行」(『繫年集』卷一二)に、「正昼当谷眠、眼有百尺威」(正昼谷に当たりて眠れば、眼に百尺の威有り)とある。

張籍にこの他九例。1「野居」にも、「寒天白日短、簷下煖我軀」(寒天白日短く、簷下 我が軀を煖む)と見えた。

〔繞林行〕林の中をめぐり歩く。昼間の虎の行動を言う。

ある場所を繞(邊)るとするのは古くからある表現。「繞林」(邊林)は唐詩にいくつか用例が見えるが、動物を主語とした例は、張説「奉和聖製過寧王宅応制」(『全唐詩』卷八七)に、「竹院龍鳴笛、梧宮鳳遶林」(竹院に龍は笛を鳴らし、梧宮に 鳳は林を遶る)、李白「蜀道難」(王琦注本卷三)、「但見悲鳥号古木、雄飛雌從繞林間」(但だ見る 悲鳥 古木に号び、雌は飛び雌は從いて林間を繞るを)とあるのは、鳥の動作を言う。また、同時代の元稹「和李校書新題樂府十二首・五弦彈」(『元稹集』卷二四)には、「辭雄皓鶴警露啼、失子哀猿繞林嘯」(雄に辭せし皓鶴は 露に警えて啼き、子を失いし哀猿は 林を繞りて嘯く)と、猿の行動として見える。

張籍にもう一例。432「憶遠曲」に、「水上山沈沈、征途復繞林」(水上 山沈沈として、征途 復た林を繞る)とあるのは、道が林の中を通っているという意味。また「繞行」の用例が、438「春日行」に、「樹樹殷勤盡繞行、攀枝未遍春日暝」(樹樹 殷勤に尽く繞り行き、枝を攀ずること未だ遍かざるに 春日暝し)と見える。

〔英華〕は「繞村」(村を繞る)に作り、これであれば、昼間から村に出てきて荒らし回る猛虎の横暴ぶりがより強調される。しかし、この句が1句の「樹冥冥」を受けていること、1〜4句が山中での虎と獸の関係を詠じていること、村民との関係は後の5〜8句で詠われていることから考えて、ここは「繞林」の方が相応しいと考える。昼間は山中に潜んでいる虎が、夜になつて積極的に行動するという虎の習性を詠っているのであろう。

なお、虎と林との関連は、陸機「苦寒行」(『文選』卷二八)に、「猛虎憑林嘯、玄猿臨岸嘆」(猛虎 林に憑りて嘯き、玄猿 岸に臨みて嘆く)とある。

〔繞林行〕林の中をめぐり歩く。昼間の虎の行動を言う。

ある場所を繞(邊)るとするのは古くからある表現。「繞林」(邊林)は唐詩にいくつか用例が見えるが、動物を主語とした例は、張説「奉和聖製過寧王宅応制」(『全唐詩』卷八七)に、「竹院龍鳴笛、梧宮鳳遶林」(竹院に龍は笛を鳴らし、梧宮に 鳳は林を遶る)、李白「蜀道難」(王琦注本卷三)、「但見悲鳥号古木、雄飛雌從繞林間」(但だ見る 悲鳥 古木に号び、雌は飛び雌は從いて林間を繞るを)とあるのは、鳥の動作を言う。また、同時代の元稹「和李校書新題樂府十二首・五弦彈」(『元稹集』卷二四)には、「辭雄皓鶴警露啼、失子哀猿繞林嘯」(雄に辭せし皓鶴は 露に警えて啼き、子を失いし哀猿は 林を繞りて嘯く)と、猿の行動として見える。

張籍にもう一例。432「憶遠曲」に、「水上山沈沈、征途復繞林」(水上 山沈沈として、征途 復た林を繞る)とあるのは、道が林の中を通っているという意味。また「繞行」の用例が、438「春日行」に、「樹樹殷勤盡繞行、攀枝未遍春日暝」(樹樹 殷勤に尽く繞り行き、枝を攀ずること未だ遍かざるに 春日暝し)と見える。

〔英華〕は「繞村」(村を繞る)に作り、これであれば、昼間から村に出てきて荒らし回る猛虎の横暴ぶりがより強調される。しかし、この句が1句の「樹冥冥」を受けていること、1〜4句が山中での虎と獸の関係を詠じていること、村民との関係は後の5〜8句で詠われていることから考えて、ここは「繞林」の方が相応しいと考える。昼間は山中に潜んでいる虎が、夜になつて積極的に行動するという虎の習性を詠っているのであろう。

なお、虎と林との関連は、陸機「苦寒行」(『文選』卷二八)に、「猛虎憑林嘯、玄猿臨岸嘆」(猛虎 林に憑りて嘯き、玄猿 岸に臨みて嘆く)とある。

3・4 向晚一身当道食、山中麋鹿尽无声

〔向晚〕晚になろうとする。「向」は「なんなん」とす。唐詩にも用例多い。張籍自身にこの他二例。43「江南春」、「向晚青山下、誰家祭水神」（晩に向とす 青山下、誰が家ぞ 水神を祭る）。『英華』は「向晚」に作るが、2句に「白日」とあるから、「晩」の方が適当と思われる。

〔一身〕次句の山中に棲む「麋鹿」と対比され、虎一頭で山中の麋鹿（多数）を静まり返らせることを言うのである。古くから用例のあることばで、例えば、蘇武「詩四首」其一（『文選』卷二九）に、「況我連枝樹、与子同一身」（況んや我 連枝の樹にして、子と一身を同じうするや）とある。唐詩にも用例が多い。張籍にも、205「哭胡十八遇」に、「文場継続成三代、家族輝華在一身」（文場 継続して 三代を成し、家族の輝華 一身に在り）とあり、家族（多数）と胡遇（一身）とが対比されている。

〔当道〕2句「林」に対応し、日中は鬱蒼とした林の中で過ごし、夜になると山道に出てくるのであろう。陳注が引く『後漢書』張綱伝には、「豺狼当路、安問狐狸」（豺狼 路に当たると、安んぞ狐狸を問わんや）と、悪事を行う寵臣が山犬（豺）や狼に喩えられている。

唐詩では、虎と一緒に使われる例が、孟郊「隱士」（『校注』卷二）に、「虎豹忌当道、麋鹿知藏身」（虎豹は道に当たると忌み、麋鹿は身を藏すを知る）とある。

〔山中〕『英華』は「此中」に作る。

〔麋鹿〕麋と鹿。あるいは二字で麋を指す。麋は大型の鹿。ことばとしては、早く『莊子』盜跖篇に、「神農之世、臥則居居、起則于于、民知其母、不知其父、与麋鹿共処、耕而食、織而衣、無有相害之心」（神農の世、臥せば則ち居居、起れば則ち于于、民 其の母を知りて、其の父を知らず、麋鹿と共に処り、耕して食らい、織りて衣、相害するの心有る無し）と、古代神農の時代の人々の暮らしを記すなかに見える。また、揚雄「長楊賦」（『文選』卷九）に、「張羅罟罟、捕熊羆豸、虎豹豺獾、狐兔麋鹿」（羅罟 罟罟を張り、熊羆 豸、虎豹 豺獾、狐兔 麋鹿を捕らう）とあるのは、狩猟の獲物として虎とともに記される。

唐詩にも用例が多く、杜甫も五例用いている。陳注はそのうち「曉望」（『詳注』卷二〇）に、「荆扉對麋鹿、応共爾為群」（荆扉 麋鹿に対し、応に爾と共に群を為すべし）とあるを引いており、これは先の『莊子』を踏まえ、

杜甫が自身の隱居生活を詠ったもの。また、虎とともに用いる例が、先にも引いた孟郊「隱士」に、「虎豹は道に当たると忌み、麋鹿は身を藏すを知る」とある。孟郊の詩の場合、虎豹と麋鹿はともに隱士を喩えている。張籍にはこの一例のみ。

〔尽无声〕みなひっそりと声を潜める。猛虎の被害を恐れて麋鹿が音を立てないでいる様子を言う。「無声」は詩文中に普通に使われることばで、早く『毛詩』にも見える（小雅「車攻」・大雅「文王」）。唐詩にも用例が多く、杜甫「投簡成華兩県諸子」（『詳注』卷二）、「君不見空牆日色晚、此老無声淚垂血」（君見ずや 空牆日色晚く、此の老 声無く 涙血を垂るるを）は、悲しみのため声が出ない。張籍にこの他二例。69「征西將」、「深山旗未展、陰磧鼓無声」（深山 旗 未だ展びず、陰磧 鼓 声無し）とあるのは、陣太鼓の音が鳴らないことを言い、175「徐州試反舌無声」に、「林幽還共宿、時過即無声」（林幽にして 還た共に宿り、時過ぎて 即ち声無し）とあるのは、春の時節が過ぎたために反舌（もず）が鳴かないことを言う。

虎の存在を獣たちが恐れるという表現は、先に挙げた司馬遷「報任少卿書」に、「猛虎 深山に処り、百獸震恐す」とあり、また、庾信「周五声調曲・商調曲四首」其二（『樂府詩集』卷一五）に、「猛虎在山、百獸莫敢侵。忠臣処国、天下無異心」（猛虎 山に在りて、百獸 敢えて侵す莫し。忠臣 国に処りて、天下 異心無し）と、猛虎が山に在ること、獣たちが横暴を振るわないとある（ただし庾信の詩では、猛虎は次句が示すように忠臣に準えられている）。また、同時代の韓愈「猛虎行」（『繫年集釈』卷一）では、「群行深谷間、百獸望風低」（深谷の間を群行すれば、百獸 風を望んで低る）と、虎が仲間と連れだつて歩くことで、百獸が平伏するとある。

以上、第1句から4句では、猛虎が山中で我が物顔に振る舞う様子を言う。

5・6 年年養子在空谷、雌雄上山不相逐

〔年年〕毎年。3「雜怨」の【語釈】参照。詩語として普通に用いられる。張籍にも用例が多い。

〔養子〕子供を育てる。詩に限らず普通に用いられることばで、古く『礼記』大学に、「未有学養子而後嫁者也」（未だ子を養うことを学びて後に嫁する者は有らず）と見える。文学作品では、嵇康「与山巨源絶交書」（『文選』卷四三）に、「今但願守陋巷、教養子孫……」（今は但だ願わくは 陋巷を守り、

子孫を教養し……とある。唐詩の用例は杜甫辺りから見え、全体としてそれほど多くないが、そのなかで杜甫と張籍にそれぞれ三例見える。杜甫の用例はいずれも動物が子を育てる意味であり、例えば「義鵲行」(『詳註』巻六)には、「陰崖二蒼鷹、養子黒柏顛」(陰崖の二蒼鷹、子を養う 黒柏の顛)とある。同じく動物が子を育てる意味では、張籍<sup>415</sup>「廢宅行」に、「鷓鴣養子庭樹上、曲牆空屋多旋風」(鷓鴣 子を庭樹の上に養い、曲牆 空屋 旋風多し)とある。

〔空谷〕深い谷。『毛詩』小雅「白駒」に、「皎皎白駒、在彼空谷」(皎皎たる白駒、彼の空谷に在り)とある。毛伝に「空は大なり」。唐以前では、謝靈運「酬從弟惠連」(『文選』巻二五)に、「務協華京想、詎存空谷期」(務く華京の想いに協う、詎ぞ空谷の期を存せん)とあり、山水の美しい隠逸の場所を言う。唐詩にも用例が多く、例えば王維「送友人帰山歌二首」其一(趙本卷一)に、「山寂寂兮無人、又蒼蒼兮多木。群龍兮滿朝、君何為兮空谷」(山寂寂として人無く、又蒼蒼として木多し。群龍 朝に滿つ、君 何為ぞ空谷にあらんや)とある。杜甫にも一例、「送惠二歸故居」(『詳註』巻一八)に、「皇天無老眼、空谷滯斯人」(皇天 老眼無く、空谷 斯の人を滯らしむ)とあるのは、詩題に言う惠二の故居のある場所を指す。

張籍にはこの一例のみ。

『樂府詩集』・『英華』等は「深谷」に作る。意味は「空谷」に同じ。「深谷」も古くから用例のあることばで、『毛詩』小雅「十月之交」に、「高岸為谷、深谷為陵」(高岸 谷と為り、深谷 陵と為る)とある。先に引いた韓愈「猛虎行」に、「群行深谷間、百獸望風低」(深谷の間を群行すれば、百獸 風を望んで低る)と見えた。

虎が谷に棲むことは、他にも成公綏の「嘯賦」(『文選』巻一八)に、「飛廉鼓於幽隧、猛虎応於中谷」(飛廉 幽隧に鼓し、猛虎 中谷に応ず)とあり、李善注所引『春秋元命苞』に、「猛虎嘯、谷風起、類相動也」(猛虎嘯けば、谷風起き、類相動くなり)と、虎が嘯くことで、谷に風が起ると言う。

〔雌雄〕虎の雄と雌。『毛詩』小雅「正月」に、「具曰予聖、誰知鳥之雌雄」(具に予を聖と曰う、誰か鳥の雌雄を知らん)とあるのは、鳥の雌雄を言う。唐詩にも多く用例が見えるが、張籍にはこの一例のみ。

〔上山〕山に上る。子に食べさせる獲物を求める虎の様子を言う。

『英華』は「上下」に作り、そうであれば山を上ったり下ったりすること。

「不相逐」雌が雄の、或いは雄が雌の後を追わない。上句とのつながりから、雌雄が一緒に行動しないということ、間断なく子の餌を探す様子を表現しているであろうか。

7・8 谷中近窟有山村、長向村家取黃犢

〔近窟有……〕洞窟の近くに……がある、の意であろう。虎が洞窟に棲むことは、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」(『後漢書』班超伝)のことわざからもわかるが、詩では、例えば杜甫「覽鏡呈柏中丞」(『詳註』巻一八)に、「渭水流関内、終南在日辺。胆銷豺虎窟、淚入犬羊天」(渭水 関内に流れ、終南 日辺に在り。胆は銷す 豺虎の窟、涙は入る 犬羊の天)とあるのは、長安を中心とする中原地方に、盜賊や異民族がはびこっていることを言うなかに見える。張籍自身にも、<sup>422</sup>「樵客吟」に、「共知路傍多虎穴、村西地暗狐兔行」(共に知る 路傍に虎穴多く、村西地暗くして 狐兔行くを)とある。

〔山村〕山里の村。現在では普通に使われることばであるが、古い詩の用例は見当たらない。唐代では盛唐の頃から用例が見え始め、例えば、王維「贈劉藍田」(趙本卷二。一説に盧象の作)に、「歲晏輸井稅、山村人夜歸」(歲晏くして 井稅を輸し、山村 人 夜に歸る)とある。杜甫にも二例。「晚」(『詳註』巻二〇)、「朝廷問府主、耕稼學山村」(朝廷 府主に問い、耕稼 山村に學ぶ)とあり、朝廷と対比して使われている。張籍にはこの一例のみ。なお、四部本・『樂府詩集』などは「山林」に作る。

〔村家〕山村の家。「山村」と同じく古い用例が見られないことば。『全唐詩』にも全部で七例しか見られず、中唐の頃から使われ始めるようである。白居易「趨生訪宿」(〇二四一)に、「村家何所有、茶果迎來客」(村家 何の有所ぞ、茶果もて來客を迎う)とあるのは、自分の家を指して言う。また賈島に「宿村家亭子」(『全唐詩』巻五七四)と題する詩がある。張籍にはこの一例のみ。

〔黃犢〕黄色い子牛。古く『韓非子』内儲説上に、「南門之外、有黃犢食苗道左者」(南門の外に、黃犢 苗を道の左に食う者有り)と見える。また『史記』封禪書に「黃犢羔各四」とあるのは、生け贄のための子牛。

張籍の詩と直接関連するのは、古樂府「平陵東」(『樂府詩集』巻二八)であろう。この詩では、酷税のために現金と二頭の馬を徴収された後、最後に

残しておいた黄犢までも手放さなければならなくなった悲劇が詠われ、人々（農民）にとつて黄犢が貴重な財産であったことがわかる。「兩走馬亦誠難、顧見追吏心中惻。心中惻血出漉、婦告我家売黄犢」（兩つの走馬も亦た誠に難し、顧みて追吏を見れば心中惻む。心中惻み 血は出でて漉る、婦りて我が家に告げよ 黄犢を売れ と）。

唐詩では、張籍以前では、杜甫「百憂集行」（『詳注』巻一〇）に、「憶年十五心尚孩、健如黄犢走復来」（憶う 年十五のとき 心は尚お孩にして、健なること黄犢の如く 走りて復た来たる）と見えるのが唯一の例。これは杜甫が自分の少年時代を振り返って、まるで子牛のように元氣よかつたと言ふもの。張籍と同時代では、白居易「宿溪翁」（〇五六五）、「歳種一頃田、春驅兩黄犢」（歳に一頃の田を種え、春 兩黄犢を驅る）とあり、農作業に関連して黄犢が詠われる。

張籍「猛虎行」、及び先の「平陵東」に関連するのは、王建「田家行」（『王建詩集』巻二）である。農民は収穫した麦や養蚕で得られた絹を自分で使おうなどとは思わない。ただ、納める税が不足して大切な子牛を売らなければならぬような事態になることだけはどうしても避けたいと、農民の願いが詠われるのなかに見える。「不望入口復上身、且免向城売黄犢」（口に入り復た身の上るを望まず、且に城に向かいて黄犢を売るを免れんとす）。

なお、猛虎と黄犢が一緒に用いられている例が、張籍より後の李涉「牧童詞」（『全唐詩』巻四七七）に、「乱挿蓬蒿箭滿腰、不怕猛虎欺黄犢」（乱りに蓬蒿を挿して 箭は腰に満つれば、猛虎の黄犢を欺くを恐れず）とあり、子牛を襲う猛虎が詠われる。

張籍にはこの一例のみであるが、「白犢」の語が、15「牧童詞」に、「入陂草多牛散行、白犢時向蘆中鳴」（陂に入りて草多く 牛散行し、白犢は時に蘆中に向かいて鳴く）と見える。

以上第5〜6句の四句では、猛虎が子育ての時期になると林から出てきて、人々にまで被害を及ぼすようになることを言う。

### 9・10 五陵年少不敢射、空来林下看行迹

「五陵年少」五陵出身の血気盛んな若者たち。「五陵」については、2「西州」の【語釈】参照。そこにも挙げた李白「少年行二首」其二（王琦注本卷六）に、「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風」（五陵の年少 金市の東、銀鞍白馬 春風を度る）と、「五陵年少」の並びで見える。

同じ字の並びは、李白と同時代の崔顥「渭城少年行」（『全唐詩』巻一三〇）

にも、「貴里豪家白馬驕、五陵年少不相饒」（貴里 豪家 白馬驕り、五陵の年少 相饒さず）とあり、また張籍と同時代では、白居易「琵琶引」（〇六〇三）に、「五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不知數」（五陵の年少 争いて纏頭し、一曲に紅綃 數を知らず）とある。

なお、五陵の年少と虎との関係については、「南山」の【語釈】でも挙げた李白「白馬篇」に、「龍馬花雪毛、金鞍五陵豪。……弓摧南山虎、手接太行猱」（龍馬 花雪の毛、金鞍 五陵の豪。……弓は南山の虎を摧き、手は太行の猱に接す）と、五陵の若者が「南山」の虎を射殺すことが詠われる。李白の詩は、晋の周処が年少の時、人々を悩ます「南山」の白額の「猛獸」を射殺した故事（『晋書』周処伝）を踏まえるとされが、ほぼ同じ内容の話が『世説新語』自新篇に見え、そこでは周処が殺した猛獸が「虎」であるとはっきり記されている。

「不敢射」自分から進んで虎を射殺そうとしない。十分に射殺すことができず能力がありながら、それをしないことをいうのであろうか。或いは、ふだんは威勢のいい五陵の若者が、いざという時に頼りにならないということであろうか。ここでは前者の意味で解釈した。

虎を射るといふ行為は、若者の勇ましさを表現する際にしばしば見られ、先の李白「白馬篇」もその一例である。張籍も28「少年行」で虎を射る勇壮な少年を詠っている。「少年從獵出長楊、禁中新拜羽林郎。獨對鞞前射双虎、君王手賜黄金璫」（少年 獵に従いて長楊に出づ、禁中 新たに羽林郎に拜せらる。獨り鞞前に対して双虎を射、君王 手づから黄金の璫を賜う）。虎を射殺すことができるのに、敢えてそれをやらないと詠うところに、五陵の若者に対する張籍の批判精神がはっきりと表現されている。

なお、「射」は、第10句「迹」が入声二二昔に属していることから入声で読むべきである。『広韻』では、去声四〇禡に弓を射る意味の「射」があり、入声「射」にはそうした意味がない。しかし、唐詩の「射」の用例を調べると、弓を射るの意味の場合、ほとんど例外なく入声であり、後の『集韻』では、入声韻にも弓を射る意味の「射」を入れている。

「空来林下看行迹」ただ林にやってきて足跡を見守るだけ。普段の勇ましさと対照的な五陵の若者の様子を言う。陳注が引く張籍「雜詩十首」其一（『文選』巻二九）には、「房櫳無行跡、庭草萋以綠」（房櫳には行跡無く、庭草は萋として以て緑なり）と、夫が旅に出てその姿がないというなかに「行跡」の語が見え、また、陶淵明「飲酒二十首」其一五（四部叢刊本卷三）にも、「班班有翔鳥、寂寂無行跡」（班班として翔鳥有り、寂寂として行跡無し）と、

同じく人の姿という意味で用いられている。六朝詩には用例があまり見えな  
いが、唐詩には多く見え、杜甫にも一例、「奉酬薛十二丈判官見贈」(『詳注』  
卷一九)に、「襄王薄行跡、莫学令威丁」(襄王 行跡薄し、令威丁を学ぶ莫  
かれ)とある。また、張籍と同じく視覚動詞と一緒に用いられた例が、韋応  
物「独遊西齋寄崔主簿」(『全唐詩』卷一八七)に、「幽徑還独尋、綠苔見行  
跡」(幽徑 還た独り尋ね、綠苔 行跡を見る)と見える。  
張籍にはこの一例のみ。

以上、9・10句は、猛虎の横暴を見て見ぬ振りする五陵の若者の様子を詠  
う。

### 【補】

一 樂府「猛虎行」の系譜における張籍「猛虎行」の位置づけ

「猛虎行」の古辞(古猛虎行)は、現在その八句が『文選』李善注等に引  
用されて残っている。冒頭の四句とおぼしき詩句は、陸機「猛虎行」題注に  
引かれており、同じものが郭茂倩『樂府詩集』の「猛虎行」題注にも引かれ  
ている。現存する八句から、古辞の内容が、高い志を抱く若者が、苦難を経  
ながら旅を続けるさまを詠じたものであった(あるいは一部にそうした内容  
が含まれていた)と推測できる。こうした古辞の内容に加えて、その形式(六  
言・六言・五言・五言……)も継承していると考えられるのが陸機「猛虎行」  
である。今、古辞と陸機「猛虎行」の冒頭四句(古辞の場合、冒頭とおぼし  
き四句)を挙げる。

古辞——飢不從猛虎食、暮不從野雀棲。野雀安無巢、遊子為誰驕  
陸機——渴不飲盜泉水、熱不息惡木陰。惡木豈無枝、志士多苦心

前二句の「〇不〇」の句法や、第2句で用いた語句を第3句でそのまま用い  
る句法が両者に共通しており、陸機は明らかに古辞を踏まえていると言える。  
この古辞と陸機の「猛虎行」を継承しているのが、孔欣、謝惠連(其一)で  
ある。

これらとは異なり、古辞の内容を継承しないのが、魏文帝、魏明帝の「猛  
虎行」である。これらは古辞の曲調を踏襲したものと思われる。魏文帝の作  
品は完篇でない可能性もあり、判断が難しい。ただ、魏文帝と明帝の作品は

語句や表現が共通しており、同じ「猛虎行」のグループに入りそうである。  
また、魏明帝の冒頭の句を詩題とする梁簡文帝「双桐生空井」も、詩中に共  
通する語句が使われていることから、同じグループに位置づけられる。なお、  
謝惠連(其二)は、現存する四句からは内容を判断することは難しい。  
以上、唐以前の「猛虎行」について概略を述べた。以下唐代の「猛虎行」  
について述べる。

儲光義と李白はほぼ同時期に活躍した詩人であり、両者の「猛虎行」は、  
それまでのものと比較してやや異なっている。

儲光義の「猛虎行」は、冒頭の句法から、古辞と陸機の「猛虎行」を意識  
していることがわかる。

寒亦不憂雪、飢亦不食人。人血豈不甘、所惡傷明神

一・二句が五言であるのは古辞や陸機と異なるものの、句法や表現は陸機ら  
の形式を踏襲しようとする意識が見られる。ただし内容的には、儲光義の詩  
では、そこに寓意があるにせよ、猛虎を主題にして猛虎自身の志が詠われる  
のに対し、古辞や陸機の場合は、猛虎は詩の素材ではあっても主体ではない。  
その点で儲光義「猛虎行」は大きく異なっている。形式は古辞系の「猛虎行」  
を継承しつつ、内容は樂府題に従って猛虎を主題としているのである。

李白「猛虎行」は、詩の形式において前代のいずれの「猛虎行」と異なっ  
ており、長編の雜言古詩(全四四句、換韻)となっている。詩題について、  
青木正児・武部利男両氏は、猛虎には安祿山の乱が進えられているとする(そ  
れぞれ、集英社「漢詩大系」『李白』、筑摩書房「世界古典文学全集」『李白』)。  
この詩の前半部に安祿山の乱の猛威が詠われており、確かにそのような解釈  
の可能性も否定できないが、主題的には陸機「猛虎行」の影響を受けている  
と考えられる。

詩のなかで李白は、政府軍と安祿山軍の戦争を古えの項羽と劉邦の戦いに  
準えつつ、劉邦の優れた家臣であった張良や韓信でさえも主人に巡り会う前  
は苦勞していたと詠じ、現在の李白自身や詩を送る相手の張旭も、この戦乱  
の世に同じ境遇にあると慰めている。

賢哲栖栖古如此 賢哲栖栖 古え此の如し  
今時亦棄青雲士 今時も亦た青雲の士を棄つ

こうした内容から、李白の「猛虎行」は、志を高く持つ者が苦難の状況に  
あるとする陸機「猛虎行」以来のモチーフを継承しており、まずはその意味

で「猛虎行」と題したものと考えられる。李白は、詩の形式や自己の境遇を詠ずるといふ点で特徴的であるが、主題的には陸機ら前代の「猛虎行」を継承していると言える。

中唐期では、韓愈、張籍、李賀に「猛虎行」がある。三者の「猛虎行」は、いずれも猛虎そのものを詠じている点で儲光羲を継承するが、三詩ともに虎や虎の行為に準えて人間社会を詠ずることが目的であり、一篇全体が明確な諷諭詩となつている点で大きく異なる。いずれの詩も、具体的にどのような社会現象を諷諭の対象としているかは明確でない。原田憲雄氏は、李賀「猛虎行」の解説で、「猛虎」には、軍隊、官吏、政治家、国家などを代入できる普遍性がある」と説明されるが（『李賀歌詩編3―北中寒―』、平凡社「東洋文庫」六五一、一九九九年、二二頁）、このことは張籍「猛虎行」にも言えるであろう。

そうしたなかで張籍「猛虎行」の独自性は、詩の構造や批判する対象の意外さにあると言える。張籍の批判の矛先は猛虎そのものに対してではなく、虎の横暴を見て見ぬ振りする五陵の若者にこそ向けられている。第1句から8句まで虎の獍猛さを二段階（1・4句、5・8句）で詠じてきたのは、五陵の若者を詠じた末二句を際立たせるためであったと言っても過言ではなからう。

こうした虎と五陵の若者の関係を現実社会に当てはめるとすれば、例えば地方の節度使とそれを監査すべき中央の役人や、地方に長く滞在する地方官とそれを取り締まるべき監察官などの関係になるであろうか。

## 二 王建「射虎行」

張籍「猛虎行」は、王建「射虎行」（『王建詩集』巻二）と、詩題・詩の形式・内容・批判する対象の意外性において類似した特徴を持つ。王建的作は、郭茂倩『樂府詩集』には採録されていないが、詩題から樂府的な作品であることは明らかである。

両詩の関連・類似については、つとに清・賀裳『載酒園詩話又編』が指摘するところであるが（※）、以下まずは王建の詩を挙げて具体的に類似点を確認したい。

- 1 自去射虎得虎歸 みづか 自ら去きて虎を射れば 虎を得て帰るに
- 2 官差射虎得虎遲 みづか 官差わして虎を射れば 虎を得ること遅し
- 3 獨行以死當虎命 独行 死を以て 虎の命に当て
- 4 兩人因疑終不定 兩人 疑うに因りて 終に定まらず

- 5 朝朝暮暮空手回 朝朝暮暮 空手もて回り
- 6 山下綠苗成道徑 山下の綠苗 道徑を成す
- 7 遠立不教汚箭鏃 遠く立ちて 箭鏃を汚さしめず
- 8 聞死還來分虎肉 死せるを聞きて 還た來たりて虎肉を分かつしむ
- 9 惜留猛虎看深山 猛虎を惜しみ留めて深山を看
- 10 射殺恐畏終身閑 射殺して 終身閑なるを恐畏す

（大意）自分で行つて虎を射れば、虎を手に入れて帰るのに、役所が派遣した者といつしよに虎を射れば、虎はなかなか手に入らない。単独で行く時は命がけて虎を殺すのに、二人いつしよでは互いに相手を疑つて結局うまくいかない。朝な夕なに手ぶらで戻るため、山のおもとの草地に小道ができた。派遣された者は、遠くに立つたまま自分の箭鏃を汚すことはしないくせに、虎を殺したと聞くや、またやつてきてその肉を分けるという。猛虎を惜しんで留め、深い山を見守るのは、射殺した結果、一生仕事がなくすることにびくびくしているのだ。

王建「射虎行」と張籍「猛虎行」とを比較した場合、特に次に挙げる三つの共通点が指摘できる。

- ① ともに七言古詩（全十句、換韻格）
- ② 猛虎や猛虎を射る者に準えて人間社会を詠じた諷諭詩である
- ③ 猛虎ではなく、射殺す側（人間）を一番の批判の対象としている

両詩がどのような状況で制作されたかのは明らかでないが、以上の共通点から考えて、張王がそれぞれ相手の詩を意識して制作したと見て間違いないからう。朱炯遠氏は「論張王樂府中的唱和現象」（『上海大学学报』（社会科学版）一九九七年十月、第四卷第五期）において、両詩が唱和の作であることを指摘し、その根拠として②に関連した言及を行っている。ここではそれ①と③を補足しているのであるが、【補】一でも言及したように、三つの根拠のうち③にこそ張籍の独自性が強く表れており、詩題は「猛虎行」「射虎行」と異なるものの、この③の特徴において両者が極めて類似した作であると指摘できるのではないかと考える。

③の、言わば「猛虎の地位の低下」とも取れる特徴は、実は韓愈「猛虎行」にも見え、三者の間には何らかの影響関係があるのかもしれない。

なお、張王樂府の唱和については、5「寄遠曲」の【補】でも言及した。

※張咏「猛虎」、故摹写怯弱以見負嵎之威。王咏「射虎」、故曲尽狡獪之態、用意不同、俱為酷肖。『詩歸』評王詩曰、「有激之言、字字痛切、似爲千古朝



事邊事寫一供狀。」此論妙甚。張詩雖工、僅詞人之言、王詩意深遠矣。(黃白  
山評、「張詩亦似爲權門勢要傾害朝士之喻、非徒咏猛虎而已」。本文は、郭  
紹虞編撰『清詩話統編』(上海古籍出版社、一九八三年)に拠った。

(畑村)

#### 14 別離曲

##### 【題解】

別れの曲。『樂府詩集』卷七一「雜曲歌辭」に「古別離」があり、解題の  
部分に次のように述べる。

楚辭曰、悲莫悲兮生別離。古詩曰、行行重行行、与君生別離。相去万余  
里、各在天一涯。後蘇武使匈奴、李陵与之詩曰、良時不可再、離別在須臾。  
故後人擬之爲古別離。梁簡文帝又爲生別離、宋吳邁遠有長別離、唐李白有  
遠別離、亦皆類此。

楚辭(九歌「少司命」)に曰く、悲しきは生別離より悲しきは莫し、と。  
古詩(『文選』卷二九「古詩十九首」其一)に曰く、行き行きて 重ねて  
行き行く、君と生きながら別離す。相去ること 万余里、各おの 天の一  
涯に在り、と。後蘇武 匈奴に使いし、李陵 之に詩を与えて曰く(『文  
選』卷二九「与蘇武三首」其一)、良時は再びすべからず、離別は須臾に  
在り、と(『文選』は前の句を「良時不再至」に作る)。故に後人 之に擬  
して古別離を爲る。梁の簡文帝又た生別離を爲り、宋の吳邁遠に長別離有  
り、唐の李白に遠別離有り、亦た皆な此に類す。

そして、梁の江淹から唐の吳融に至るまでの、十一人・十三首の「古別離」、  
唐の王適以下八人・十首の「古離別」、梁の簡文帝以下三人・三首の「生別  
離」、宋の吳邁遠の「長別離」、唐の李白以下三人・四首の「遠別離」(張籍  
の一首を含む)、李白の「久別離」、戴叔倫の「新別離」、劉氏瑶の「暗別離」、  
白居易の「潜別離」という順で詩を収録している。

最後に置かれるのがこの「別離曲」で、張籍のこの詩と陸龜蒙のものが収  
められている。

これらの樂府に詠じられる内容や感情は様々で、男女の別離が多いが、友  
人との別離もあり、古詩に擬するのに徹したような作もあれば、個人的な体  
験に基づいていると思われるものもあり、別離の感傷にひたるものもあれば、

児女の情としてしりぞけるものもあり、多数のバリエーションがあるといえ  
るだろう。

##### 【本文・書き下し文】

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 1 行人結束出門去  | 行人結束して 門を出でて去る     |
| 2 幾時更踏門前路  | 幾時か 更に踏む 門前の路      |
| 3 憶昔君初納采時  | 憶う 昔 君初めて納采せし時     |
| 4 不言身屬遼陽戍  | 言わず 身は遼陽の戍に属すと     |
| 5 早知今日當別離  | 早に 今日 当に別離すべきを知らば  |
| 6 成君家計良爲誰  | 君が家計を成すこと 良に誰が爲ならん |
| 7 男兒生身自有役  | 男兒 身を生ずれば 自ら役有るも   |
| 8 那得誤我少年時  | 那ぞ 我が少年の時を誤るを得ん    |
| 9 不如逐君征戰死  | 如かず 君を逐いて 征戰して死するに |
| 10 誰能獨老空閨裏 | 誰か能く独り老いん 空閨の裏     |

##### 【口語訳】

- 1 旅立つ人は旅支度を調べ 門を出て去って行きます
- 2 いつになつたら 再びこの門の前の道を踏むことがあります
- 3 思い出せば 昔 あなたが最初に結婚を申し込んだときに
- 4 自分の身が遼陽の守備兵に属していることを 言いませんでした
- 5 今日になってお別れしなければならぬことを もっと早く知っていたな  
ら
- 6 いったい誰のために家の仕事をやるのか 分からなかつたでしょう
- 7 男として生まれたからには 戦いはつきものといいますが
- 8 だからといって私の青春を 台無しにはできないはずす
- 9 あなたの後を追って 戦いに出て死んだ方がましです
- 10 どうして ひとりぼつちの部屋で年老いてゆくことができましよう

##### 【押韻】

去―去声九御 路―去声一一暮 戍―去声一〇遇(古詩通押)  
離―上平五支 誰―上平六脂 時―上平七之(同用)  
死―上声五旨 裏―上声六止(同用)

##### 【語釈】

## 1・2 行人結束出門去、幾時更踏門前路

〔行人〕3「雑怨」9・10句に「山川豈遙遠、行人自不返」の句が見えた。その【語釈】参照。この詩においては、妻が出征兵士である夫を指して用いている。

冒頭に夫を「行人」と表現しているのは、第三者的視点から状況設定をしているとも考えられるが、あるいは、自分を捨てて戦争に出て行くという理解できない夫の行動に、埋めがたい距離感を感じる妻の思いが込められているのかもしれない。

〔結束〕本来は縛る意で、抽象的な束縛の意味にも用いるが、ここでは旅支度をする意であろう。出征の場合なので、軍装を調えるという方が近いかもしれない。

梁の褚翔の「雁門太守行」(『樂府詩集』卷三九。『藝文類聚』卷四二は梁の簡文帝の作とする)に「便聞雁門戍、結束事戎車」(「便ち聞く 雁門の戍、結束して 戎車を事とすと」という例は、この意味で詩に用いられた早い例であろう)。

唐詩にもいくつか用例が見える。陳注が引く李白の「古風五十九首」其二三(王琦注本卷二)に「人生鳥過目、胡乃自結束」(人生 鳥の目を過ぐるなり、胡ぞ乃ち自ら結束せん)という例は、自分を束縛するという意味で用いられた例。高適の「塞下曲」(『全唐詩』卷二二)に「結束浮雲駿、翩翩出從戎」(結束す 浮雲の駿、翩翩として 出でて戎に従う)といい、劉長卿の「送南特進赴歸行營」(『全唐詩』卷一四八)に「翩翩新結束、去逐李輕車」(翩翩として 新たに結束し、去りて李輕車を逐う)という例は、從軍する者が旅支度を調える例。

商売の旅の支度にも用いられ、杜甫に三例あるうちの「最能行」(『詳註』卷一五)に「小兒學問止論語、大兒結束隨商旅」(小兒は學問 論語に止まり、大兒は結束して 商旅に隨う)という例は、その例といえよう。

張籍の例はこれのみ。

〔出門去〕門を出て去る。「出門」については、後藤秋正・松本肇両氏編『詩語のイメージ』に、「不出門」とともに詳しい解説がなされている(増野弘幸氏執筆)。その中では、

①外出を言う(風景を鑑賞することも含む)

②別離を示す(出征を含む)

③出自の系統を言う

④思いを含みつつ出門し、その思いと外の風景を重ね合わせて見る

⑤世間との交わりをいうと分類がなされている。

この「出門去」は、その中では②の分類に入る、ごく普通の表現といえようが、詩の中でわざわざ三字を費やして表現するのは、やはり辛い別れの旅立ちや非常な決意を持った門出を強調するための場合が多いようである。

〔出門去〕の用例は、六朝詩には一例、陶淵明『擬挽歌辭』三首其二(四部叢刊本卷四)に「一朝出門去、歸來夜未央」(一朝 門を出でて去れば、歸來 夜未だ央きず)という。死を喩えた例である。ただし、去の字を「易」に作るテキストもある。

唐詩にはしばしば見える表現。崔顥の「古遊俠呈軍中諸將」(『全唐詩』卷一三〇)に「仗劍出門去、孤城逢合圍」(劍に仗りて 門を出でて去れば、孤城 合圍に逢う)といい、李白の「送族弟綰從軍安西」(王琦注本卷一七)に「爾隨漢將出門去、剪虜若草收奇功」(爾は漢將に隨い 門を出でて去る、虜を剪ること草の若く 奇功を収めよ)という例は、從軍の門出に用いられたもの。

權德輿の「送別沅汎」(『全唐詩』卷三二三)に「羸車出門去、悵望交涕淚」(羸車 門を出でて去り、悵望して 交ごも涕淚す)といい、韓愈の「送李翱」(『繫年集釈』卷六)に「揖我出門去、顔色異恒時」(我に揖して 門を出でて去り、顔色 恒の時に異なれり)という例は、友人との別離の例。

杜甫に一例、「垂老別」(『詳註』卷七)に「投杖出門去、同行為辛酸」(杖を投じて 門を出でて去り、同行 為に辛酸す)という場合は、老人が妻と別れて戰場へと旅立つ例で、特に悲劇的である。

張籍には他に用例がない。

〔幾時更踏門前路〕いつになったら、もう一度門の前の道を踏むことができるだろうか。いつになったら帰ることができるだろう。帰るあてはないという方向が中心であろう。

「幾時」は、詩においては、「人生幾時」のように、「どのくらい」と期間を指して用い、反語によって短いことを表現する場合が多いが、ここでは単に「いつ」の意。前掲塩見邦彦氏『唐詩口語の研究』に詳しい。

張籍には他に七例、113「晚秋閑居」に「万種閑事、一生能幾時」(万種 尽く閑事、一生 能く幾時ぞ)というのが「どのくらい」の例である他は、すべて「いつ」の例である。

「門前路」は門の前の道。前の句の「出門去」を承けた表現である。「門前」が常用語で、詩においても膨大な用例があるので、「門前路」もごく一

一般的なことばのように思われるが、詩における以前の用例は未見。同時代でも、わずかに李賀の「将発」(王琦注『李長吉歌詩彙解』卷三)に「秋白遙遙空、日滿門前路」(秋は白し、遙遙たる空、日は満つ 門前の路)の例をみるのみ。張籍の用例もこれのみ。晩唐に三例ほどの例が残る。この句、宋本は「馬蹄幾時更踏門」(馬蹄 幾時か 更に門を踏まん)に作り、『樂府詩集』は「馬蹄幾時踏門路」(馬蹄 幾時か 門路を踏まん)に作る。そうであれば、「踏む」の直接の主語は、馬ということになる。「馬蹄」は馬のひづめ。曹植「白馬篇」(『文選』卷二七)に「仰手接飛猱、俯身散馬蹄」(手を上げて 飛猱に接し、身を俯して 馬蹄を散らす)と見えるなど、古くから多くの用例がある。張籍にも他に六例の用例がある。中でも27「関山月」に「秋月明朗関山上、山行人馬蹄響」(秋月 明朗 関山上、山中の行人 馬蹄響く)というのは、出征兵士の困難な旅を表現したものである。「門路」は、「荆門路」「雲門路」といった「〇門の路」という例以外には、以前の用例が見当たらないことば。晩唐では、李群玉の「童安寺佳人阿最歌八首」其四(『全唐詩』卷五七〇)に「門路穿茶焙、房門映竹煙」(門路 茶焙を穿ち、房門 竹煙に映ず)というなどの用例が見える。

### 3・4 憶昔君初納采時、不言身属遼陽戍

「憶昔」思えば昔に。過去の経験を追懐したり、歴史上の出来事を持ち出す時によく用いられることば。

六朝詩にも散見するが、唐代になってたくさんこの用例が見られるようになる。孔紹安の「傷顧學士」(『全唐詩』卷三八)に「憶昔江湖上、同詠子衿詩」(憶う 昔 江湖の上、同に子衿の詩を詠ず)というのは、過去の経験を追懐する例であり、劉希夷の「春女行」(『全唐詩』卷八二)に「憶昔楚王宮、玉樓妝粉紅」(憶う 昔 楚王の宮、玉樓 粉紅を妝う)というのは、故事を持ち出す場合に用いた例である。

杜甫にも多くの用例があり、先に挙げた「垂老別」にも「憶昔少壯日、遲迴竟長嘆」(憶う 昔 少壮なりし日を、遅迴して 竟に長嘆す)という句があつて、老人が自らの過去を追憶する。他に、「憶昔二首」(『詳註』卷一三)や「憶昔行」(同卷二一)があり、詩の冒頭に「憶昔」の語を用いて過去を追懐している。

顧況の「棄婦詞」(『全唐詩』卷二六四。一に李白の作とし「去婦詞」と題する)に「憶昔未嫁君、聞君甚周旋」(憶う 昔 未だ君に嫁がず、君が甚だ周旋するを聞く)というのは、この詩と同じく、女性が結婚前のことを思

い出すという状況で用いられている。

「君初納采時」あなたが最初に結婚を申し込んでくれた時。

「納采」は、婚姻の時の六礼の中の第一の礼。『儀礼』士昏礼や『礼記』昏義に記述がある。仲人の媒介で結婚の話がまると、男の家から贈り物をして女の家が受け取る。

六朝詩にも唐詩にも、用例が検出しえない。礼の規定の用語でもあり、詩語としては、極めて生硬なことばであると思われる。

なお、その他の五礼は以下の通り(なお、李冬生注には納采と納徵を混乱させるような表現があるが、別の礼である)。

問名(男の家が女の家、その母の姓名を尋ねる)

納吉(男の家が結婚を占い、吉であることを女の家知らせる)

納徵(男の家から女の家幣を納めて、婚約のあかしとする。日本でいう結納)

請期(男の家が結婚の期日を女の家申し出る)

親迎(男が女を迎えに行く)

六朝詩と唐詩において、結婚における礼としての用例を検すると、「納吉」から「請期」までの三礼は見出せない。「問名」が六朝詩に一例、隋の沸大の「委靡辞」(『古詩紀』一一八)に「問名諧帥、占相良時」(問名 諧い帥い、良時を占い相す)と見えるのが、その意味の用例のようである。唐詩には用例がない。また「親迎」は唐詩に四例を見出せるのみで、六朝詩には用例がない。一例を挙げれば、郭正一の「奉和太子納妃太平公主出降」(『全唐詩』卷四四)に「礼盛親迎晋、声芬出降齐」(礼は盛んにして 晋に親迎し、声は芬として 齊に出降す)という句がある。

いずれも、やはりかたいことばで、詩語としては馴染まないであろう。「親迎」のことばが、わずかながら最も用例が多いのは、新郎が自ら新婦を迎えるという婚礼のクライマックスの行事が、詩の題材としてはふさわしいからであろうか。

ここで張籍が、生硬な「納采」のことばを詩に用いたのには、次の二つの理由が考えられると思う。一つは、それが礼の規定に則った正式な結婚であることを強調し、きちんと手続きを踏んだ正式な結婚でありながら、夫が自分に隠していたということを際立たせるためであろう。そしてもう一つは、六礼の中でも第一の「納采」の時であることを強調し、最初からずっと自分を騙し続けてきたということを印象づけるためではないだろうか。

「不言身属遼陽戍」自分が遼陽の守備兵に属しているといわなかった。夫が

隠していたことに對する非難のことば。

「遼陽」は地名。現在の遼寧省遼陽市一帯。「戍」は防衛の軍隊。李冬生注に、戍は辺防地区の營壘・城堡のことをも指すこと、北魏が辺境の要地に兵をおいて防衛し、大きなものを「鎮」、小さいものを「戍」と称したこと、北辺で州郡を設けない地では、戍は鎮に属しており、遼陽もそういった状況であったこと等を指摘している。

詩における用例は、六朝では庾信に一例見えるのみ。「擬詠懷二十七首」其二〇(『庾子山集注』卷三)に「代郡蓬初転、遼陽桑欲乾」(代郡 蓬は初めて転じ、遼陽 桑は乾かんと欲す)という。代郡とともに北方の辺境を表すことばとして用いたものである。

唐詩においては、辺塞を表す地名として、初唐から多くの詩に詠じられている。陳注にも引く沈佺期の「古意呈補闕喬知之」(『全唐詩』卷九六)に「九月寒砧催木葉、十年征戍憶遼陽」(九月 寒砧 木葉を催し、十年 征戍 遼陽を憶う)といい、張九齡の「饒王尚書出辺」(『全唐詩』卷四九)にも「夏雲登隴首、秋露泣遼陽」(夏雲 隴首に登り、秋露 遼陽に泣る)の句がある。ともに辺境の地の代表としてこの地名を用いている。

また、陳子昂の「征東至洪門答宋十一參軍之間」(『全唐詩』卷八三)には、「若問遼陽戍、悠悠天際旗」(若し遼陽の戍を問わば、悠悠たり 天際の旗)と、「戍」の文字とともに用いられている。

張籍の用例はこれのみ。

この二句、夫を非難する部分の最初の二句。夫が結婚の最初から自分を騙して、いざれ訪れる別れを隠していたことをなじる。

### 5・6 早知今日当別離、成君家計良為誰

「早知今日当別離」今日お別れしなければならぬことが、もつと早く分かつていたら。

「早知」は、早くから分かっているの意。詩中でも六朝からしばしば用いられる。この句のように、苦い悔恨とともに用いられた例として、王昌齡の「従軍行二首」其一に「早知行路難、悔不理章句」(早に行路の難きを知らば、章句を理めざるを悔いんや)といい、岑參の「行軍二首」其二(『校注』卷三卷)に「早知逢世乱、少小謾讀書」(早に世乱に逢うを知らば、少小謾りに書を読みき)というなどがある。張籍には他に二例。ともにずっと以前から評判を聞いていたという文脈で用いている。

「今日」は常用のことば。12「築城詞」にも見えた。その【語釈】参照。

張籍が「別離」とともに用いた例としては、450「別段生」に「貧賤事俱難、今日有別離」(貧賤 事俱に難く、今日 別離有り)の句がある。これは友人との別離の例。ここで「今日」の語を用いるのは、「今になって」ということを強調しているのである。

「別離」も常見の語で、膨大な用例がある。陳注には【題解】にも見えた『楚辞』の例を引く。張籍には、詩題で36「遠別離」があるほか、詩中では他に十五例の用例がある(丸山茂氏の索引によれば十六例となるが、そのうち一例は劉禹錫の「楊柳枝詞」)。友人との別れを表現したものがほとんどだが、54「思遠人」に「楊柳別離処、秋蟬今復鳴」(楊柳 別離の処、秋蟬今復た鳴く)というのは、男女の別れをいう例であろうか。

「成君家計良為誰」あなたの家のことをやり遂げるのは、いったい誰のためなのでしょう。

「家計」は、家事に関する計画、家の仕事の意味であろう。「韓非子」等に見える古いことばだが、詩における用例は少なく、六朝では民歌「捉搦歌四曲」其四(『樂府詩集』卷二五)に「小時憐母大憐婿、何不早嫁論家計」(小時は母を憐れみ 大には婿を憐れむ、何ぞ早に嫁して家計を論ぜざる)という例を見るのみ。唐においても、盛唐までの例は、岑參に二例見えるのみである。陳注に引く例を挙げれば、「贈酒泉韓太守」(『校注』卷二)に「俸錢尽供客、家計亦清貧」(俸錢 尽く客に供し、家計も亦た清貧)という。この例は家の仕事の中でも会計のことに中心がある表現のようだ。

張籍には他に一例、244「寄王六侍御」に「積得葉資將助道、肯嫌家計不如人」(積み得たり 葉資の將に道を助けんとするを、肯えて嫌わん 家計の人に如かざるを)の句がある。これも経済的なことに傾くであろう。

「良」の文字、「まことに」と訓じたが、李冬生注は「精善、賢能」と注して、心を込めてきりもりするというような意で解している。

この二句、はつきりとは意味をつかみがない。

徐注は、「成君家計」に、「与你成爲家屬、為你完成眷屬」と注した上で、「もし結婚した後、今日になって別れることを早くから知っていたら、私は實際誰のために家族を完成させるのか分らない。もしあなたのためというなら、あなたは妻と別れるのだし、もし私のためというなら、私は夫と別れるのですか?」とパラフレーズする。

徐注とはややニュアンスが異なるが、ここでは、「もし今日の別れを早くから知っていたら、いったい誰のために家のことをやっているのか分からなかったら」と解してみた。前の部分で、夫が結婚前に知らせてくれな

ったことを責めたのを承けて、「今日の別れを知らなかったからこそ、あなたのためにと尽くしてきたが、もし知っていたら誰のためなのか分からなかったろう」と、さらに夫に詰め寄っているのではないだろうか。早く教えてくれば、別れが運命づけられたこんな結婚などしなかったのに、という気持ちであろう。そして次の二句で、さらに夫をなじることばに続くのではないだろうか。

## 7・8 男児生身自有役、那得誤我少年時

〔男児生身自有役〕男として生まれたからには、おのずと兵役がある。

〔男児〕も常用の語。詩においても、古く辛延年の「羽林郎詩」(『玉臺新詠』卷一)に「男児愛後婦、女子重前夫」(男児は後婦を愛し、女子は前夫を重んず)の句があるなど、無数の用例がある。陳注は、杜甫に十二例あるうちの「莫相疑行」(『詳註』卷一四)に「男児生無所成頭皓白、牙齒欲落真可惜」(男児 生まれて成す所無く、頭は皓白、牙齒は落ちんと欲し 真に惜しむべし)という例を引く。張籍にはこの一例のみ。

〔生身〕は以前の用例が見当たらない。六朝詩では鮑照の「苦熱行」(『文選』卷二八)に「生軀踏死地、昌志登禍機」(生軀 死地を踏み、昌志 禍機に登る)と、類似した「生軀」の表現が見えるのみ。唐詩では、韓愈になつて「琴操十首」其八「雉朝飛操」(『繫年集釈』卷一一)に「生身七十年、無一妾与妃」(身を生じて 七十年、一の妾と妃と無し)という句などが見える。張籍の用例はこれのみ。

〔那得誤我少年時〕どうして私の若い時期を誤らせることができましょう。

〔誤〕は、ここでは、台無しにする、めちやくちやにする、といったニュアンスであろう。「古詩十九首」其十二(『文選』卷二九)の「服食求神仙、多為藥所誤」(服食して 神仙を求むるも、多く藥の誤る所と為る)や、杜甫の「奉贈韋左丞二十二韻」(『詳註』卷一)に「執袴不餓死、儒冠多誤身」(執袴 餓死せず、儒冠 多く身を誤る)などが、これと近い用い方といえるようか。

〔少年〕は、すでにしばしば見えた。3「雑怨」の【語釈】参照。そこに引いた梁の簡文帝の「妾薄命」も、「時」の字を伴って用いられていたが、以前の詩に「少年時」の用例も散見する。杜甫の一例を挙げれば、「酔為馬墜諸公携酒相看」(『詳註』卷一八)に「騎馬忽憶少年時、散蹄迸落瞿塘石」(馬に騎りて忽ち憶う 少年の時、蹄を散じて迸落す 瞿塘の石)の句がある。

張籍には「少年時」の用例がもう一例、160「春日留別」に「看却春人晚、莫輕少年時」(看却す 春人の晩、軽んずる莫れ 少年の時)と見える。

この二句、夫を責める部分の最後の二句。「男には出征は付きものだ」という、当然予想される反論を提示したのち、「私の青春を台無しにはできないはずだ」と、さらに反駁を加えているといえるのではないだろうか。

## 9・10 不如逐君征戰死、誰能独老空閨裏

〔不如逐君征戰死〕あなたを追って出征し、死んだ方がましだ。

〔征戰〕は、陳注にも引く王翰の「涼州詞」(『全唐詩』卷一五六)に「醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回」(酔うて沙場に臥すとも 君笑う莫れ、古來征戰 幾人か回る)の有名な用例があるが、六朝詩には二例しか用例が見出せず、そのうち一例は制作年代のよく分からない、蔡琰作と伝えられる「胡笳十八拍」第十拍(『樂府詩集』卷五九)である。それを除けば、北周の王褒の「從軍行二首」其一(『文苑英華』卷一九九)の「兵書久閑習、征戰數曾經」(兵書 久しく閑に習い、征戰 數しば曾て経たり)の例しか見当たらない。

唐代に入ると、初唐から極めて多くの用例が残されており、唐人の好んだ詩語といえそうである。李端の「宿石澗店聞婦人哭」(『全唐詩』卷二八六)には「自說夫因征戰死、朝來逢著旧將軍」(自ら説く 夫は征戰に因りて死す、朝來 旧將軍に逢著すと)と、「死」の字を伴って用いられている。ただし、杜甫には、異なるある一例を除けば用例がない。

張籍の用例は他に二例、ともに樂府である。うち34「妾薄命」に「君愛竈城征戰功、妾願青樓歌樂同」(君は愛す 竈城 征戰の功、妾は願う 青樓に歌樂を同じうするを)という例は、出征兵士の妻を詠じた樂府に用いられた例である。

〔誰能独老空閨裏〕一人ぼっちの部屋で年老いるのに、誰が耐えられよう。

陳注に引く、「古詩十九首」其二(『文選』卷二九)の「蕩子行不歸、空床難独守」(蕩子 行きて歸らず、空床 独り守り難し)の句を思い起こさせる句である。

〔空閨〕は、夫のいない寢室。曹植の「雜詩六首」其三(『文選』卷二九)に「妾身守空閨、良人行從軍」(妾身 空閨を守り、良人 行きて從軍す)といい、江淹の「採石上菖蒲」(胡之驥註『江文通彙註』卷三)に「不見空閨裏、縱橫愁思端」(見ず 空閨の裏、縱橫 愁思の端)というなど、多く

の用例がある。後者は「裏」の文字とともに用いている。

また、賀蘭進明の「行路難五首」其三(『全唐詩』卷一五八。あるいは高適の「塞下曲」とする。『全唐詩』卷二一三)には「蕩子従軍事征戦、蛾眉嬋娟守空閨」(蕩子は従軍して、征戦を事とし、蛾眉は嬋娟として、空閨を守る)と、「征戦」とともに用いている。杜甫には用例がなく、張籍はこの一例のみ。

別れるくらいなら夫の戦争について行きたいという妻の思いは、杜甫の「新婚別」(『詳註』卷七)にも描かれる。「新婚別」では、「誓欲随君去、形勢反蒼黄。勿為新婚念、努力事戎行。婦人在軍中、兵氣恐不揚」(誓いて君に随いて去かんと欲するも、形勢反つて蒼黄。為す勿かれ、新婚の念を、努力して、戎行を事とせよ。婦人軍中に在らば、兵氣恐らくは揚らざらん)云々と、いわば夫の立場を氣遣つて衝動を抑える妻が描かれているが、張籍のこの詩では、非常に率直に自分の思いをぶつけているといえるだろう。

#### 【補】

この詩は、押韻の上からは、1〜4句／5〜8句／9・10句と分けることができるが、第3句冒頭に「憶昔」の表現があつて詩中の時間が転換しており、意味の上からは次のように分けられるのではないかと思う。

- 1・2句―夫の出発の状況と、二度とは会えない気持ち
- 4〜8句―夫に対する非難のことば。

#### 9・10句―妻の悲痛な決意。

特に中間の夫に対する非難の部分は、夫が隠していたことを責め、自分の努力が無駄だったことを怒り、反論を予測してそれに反駁する、という流れのようで、非常にリアルで生彩があると思われる。

【題解】に述べたように、別離を詠ずる「古別離」の系統の樂府には、様々なバリエーションがあり、いわば「手垢の付いた」素材であろう。その中でも、張籍のこの作は、畳みかけるように男性の不実をなじる、女性の率直な思いが詠じられているという点で、異色の作品といえるように思う。これまで訳注を施した中にも、7「征婦怨」10「寄衣曲」等、非常に強い調子で女性の真情を詠じた作品があつた。

張籍の樂府の中で女性の姿を生き生き描く作品が重要な位置を占めることについては、徐注本の「導言」でも張王の樂府の特色の一つとして触れ、続いて赤井益久氏が「張王樂府論(上)」(『漢文学会々報』第三六輯、一九八〇年)で、張籍樂府の特質である「民衆の苦樂の描出」の中でも、特に女性を描いていることを高く評価しておられる。さらに張修蓉氏が『中唐樂府詩研究』において、「代婦女訴怨的樂府詩」を主要な三つの題材の一つとし、「紀作亮氏も『張籍研究』(黄山書社、一九八六年)において「同情広大婦女の悲惨遭遇」を取り挙げている。また、専論としては、高若蘭氏に「試論張籍詩中の婦女形象」(『大陸雜誌』第九五卷第二期、一九九七年)があるなど、多くの優れた研究がなされている。

(橘)